

ひょうご聴障ネット 夏の学習会 2013年8月11(日)  
「障害と自己責任～“理解”の輪を広げよう～」

講師：湯浅 誠（ゆあさ まこと）氏

社会運動家・活動家。反貧困ネットワーク事務局長、NPO 法人自立生活サポートセンター・もやい理事。90年代よりホームレス支援に携わる。2008～09年、年末年始の「年越し派遣村」で村長を勤める。2009年から通算2年間、内閣府参与。著書に「反貧困」（岩波新書、2008年）、「どんとこい！貧困」（イーストプレス「よりみちパン！セ」シリーズ、2009年）、「ヒーローを待っていても世界は変わらない」（朝日新聞出版、2012年）他。

## 第1部 当事者の声

第1部は、例年通り、兵庫県内の3名の聴覚障害当事者から、「輪の広げ方」「理解を広げたい思い」「自己責任と自己決定」など、テーマに沿ったお話をいただきました。

### ● Kさん（神戸市難聴者協会）〈難聴者〉

初めまして。神戸市難聴者協会のKです。よろしくをお願いします。

私は右耳に人工内耳、左耳に補聴器をつけている「中途失聴者」ですが、ご覧のとおり、見た目には健常者と見分けが付きません。また、おしゃべりが大好きなので、声を出して会話もできます。なので「聞こえない、聞こえにくい」という障害を持っていることに気づかれにくいです。

補聴器と人工内耳を両耳につけると、聞こえの改善にはなりますが、健常者の方と同じように聞こえるわけではありません。騒がしいところやたくさんの方がいるところでの会話は聞き取りにくいので、とても疲れます。初めに「難聴」であることを伝えていても、何度も聞き返すとすごく嫌な顔をされることがあります。この瞬間が一番つらいです。

また職場においても、朝礼や会議など「音」による情報が耳に届きません。必要な情報が入らないことで、仕事上のトラブルになることもあります。その場に一緒にいたというだけでは、必要な情報が入らない私には「要約筆記」という書いて伝えてもらう「情報保障」が必要不可欠です。その支援さえ受けられれば、健常者と変わりなく社会生活を送れることを毎日痛感しながらも、周囲の理解、費用負担の面などで実現に至らず、気持ちを押し殺して生活しています。

必要な情報さえ得られればできることもあるのに、それが受けられないことにより職場でも適切な評価を受けているとは思えません。

職場の面談で「電話ができないから、これ以上の評価はできない」とはっきり告げられたこともあります。この気持ちは、同じ難聴者・中途失聴者にしか理解してもらえないと思います。

また人間関係においても、雑談の中で気付きもあるのですが、雑談なのか仕事の話なのか様子を見ているだけでは判断ができず、大事な情報を逃してしまうこともたびたびあります。

湯浅氏の著書の中で「声を上げること」が大事だとありましたが、自分が勤務する十数人の部署の人々にさえ、理解してもらうことが難しいです。どのように「声を上げ」どのように「輪を広げていく」のがいいのか今日の講演の中でヒントが得られればと思っています。どうぞよろしくお願いします。

## ● ○さん (NPO 法人 兵庫盲ろう者友の会) 〈盲ろう者〉

NPO 兵庫盲ろう者友の会理事の○といいます。よろしくお願いします。

聴覚障害は大きく分けると、3つに分かれます。ろう者、難聴者、盲ろう者です。それぞれの違いについてお話したいと思います。

盲ろう者は、すぐ目の前で起こっている災害や事故などの様子がまったくわかりません。まわりの人から伝えてもらえないとわからないのです。触手話などで情報を受けることによってわかります。災害が起こったとき、全く情報がいらず不安になってしまいます。台風で水害が起こっていてもただ家の中にいるしかありません。まわりからの働きかけや刺激がないと全く孤立してしまうのです。結局そのまま何もわからず一夜を過ごして、やっと次の日に誰か助けに来てくれた時に、今までの様子がわかります。前日に起こっていることを受け止めるまでにはとても時差があります。災害時に安心して情報が受けられること、そういう保障があって初めてわかるのです。

初代盲ろう者友の会会長の吉田さんは、阪神大震災で被災したとき、家の中が散乱した状況を、醤油瓶の割れた匂いで感じる事ができたと言われました。そして窓を開けたときの火の臭いで外の災害の様子を感じたと話していました。

盲ろう者の日常生活の中には困難なことがたくさんあります。家族の中で困らんをすることもありません。家族の様子、表情や身振りなども見ることはできません。ホームサインで肩をたたいてもらったり、合図をしてもらわなければ何もわからないままなのです。災害情報などもきちんと受けられる状況が必要なのです。

また手話サークルで交流などがあり、通訳介助員と共に参加することもあります。サークルの皆さんの様子、表情などを見ることもできません、どんな様子なのか、どんな話をされているのかも全くわからないのです。みなさんが語り合っておられる様子も

私には伝わってきません。触手話などで情報が得られることにより参加することができます。

盲ろう者の通訳介助員の制度があっても、毎日、いつでもどこでも利用できるわけではありません。利用できる範囲が限られていることもあります。もっとも外に出たい、と思った時に、ガイドを探すのも大変です。家から一歩外に出ようと思うと、不安が付きまといます。買い物も手探りで、なかなか自分の欲しいものを手に入れることができません。結局は家に引きこもることになってしまいます。

この会場にも手話通訳者、要約筆記者などの情報保障の方がおられますが、盲ろう者には一人につき二人の情報保障者がいます。通訳介助員はたくさん必要です。盲ろう者が10名社会参加していこうとすると通訳介助者が20名必要になります。普通の手話通訳者、要約筆記者だと2～3名、多くても6名くらいいいのですが、盲ろう者の場合には2倍以上の通訳介助員が必要になります。通訳介助員の養成が必要になるわけです。盲ろう者が皆さんと同じように社会参加していけるように、どうか皆さんの支援とご協力をよろしくお願いします。

### ● 大矢暹さん（特別養護老人ホーム 淡路ふくろうの郷 施設長）〈ろう者〉

私たちは特別養護老人ホーム淡路ふくろうの郷から入居の方と一緒に参りました。限られた時間ですので、要約してお話しさせていただきます。

みなさん覚えてらっしゃいますか。みなさんと5億円の募金活動をしたこと。8年前に開所してその前から取り組まれた募金活動です。

福祉法人の設立と淡路ふくろうの郷地を建てることを目標に、本当に力を合わせて活動してまいりました。でも5億円もの自己資金、それは本当に私たちの責任、当事者の『自己責任』本当でしょうか。

国の補助はわずか2億4千万円。残る6億円も20年ローンの借入金、つまり私たちの負担です。本当にそんな仕組みでいいのでしょうか。私は強い疑問を感じます。

こちらの竹邊さんは20歳から30歳、40歳、50歳、60歳、70歳になるまでの長い間、サナトリウム、精神病院に隔離されていたんです。手足を拘束縛されることもしばしばのことです。ふくろうの郷の開所の時、2006年の4月27日です。ふくろうの郷に連れて来られて生活されています。

大矢「病院の生活はどうだった？」

竹邊「病院は大嫌です。ふくろうの郷にずっといたい。これからもずっといたいです。」

この絵は竹邊さんが描かれたものです。50年間という長い間、どんな気持ちで精神病院で生活していたと思いますか。この絵画は、ふくろうの郷の人々です。

竹邊さんの好きな人です。温かく寄り添われた皆さんです。

ふくろうの郷のお年寄り、職員を竹邊さんが描かれたのです。今まで精神病院の中で苦しい思いをしてきたけれど、ふくろうの郷で手話や身振りで、意思が通じ合い、受け入れてくれる、心が通う嬉しい気持ちで、このように人物の絵になったのでしょうか。

ほんとに竹邊さんを50年間も精神病院に閉じ込めなければいけなかったのでしょうか。それは竹邊さんの自己責任ですか。

皆さんが共にふくろうの郷をと踏ん張らなければ、竹邊さんは死ぬまで精神病院に入れられていたと思います。本当にそれが竹邊さんの責任でしょうか。

こちらは勝楽さんです。向こうにあるのは勝楽さんが作られたお人形です。50体ものたくさんの人形を持ちこんで、ふくろうの郷に入所されました。どうしてかというと、これは子供の代わりとおっしゃるのです。

大矢「子供を産みたかったんですね？」

勝楽「そうです。二人子供を産みたかったんです」

けれどもご主人が断種手術を受けさせられて産めなくなってしまった。その悲しい思いを人形作りに込められたんですね。

ろう者は子供を産んではいけないんですか。勝楽さんたちは二人の子供を産みたい。けれども父親がそれを受け止められなかった。病院に行かせて断種手術を強いた。昭和35年の出来事です。

その悔しさ、苦しみ、悲しみの気持ちが人形に託された。人形作りに向かわせた。断種手術、これはろう者夫婦の責任なんですか。皆さんどのように思われますか。

それから50年もたった今、妊婦のお母さんの出生前の診断、採血してお腹の中の子どもの遺伝子を調べて、障害があるかどうか調べるといのが始まった。優生思想がまたもや医学の場で、公然とうごめき始めた。

障害があることが分かった時には、その出産を取りやめる、中絶するかどうか、それは「自己決定」「自己責任」とお母さんに押し付け。自分の責任で判断して決めろとされている。かつての優生思想、障害者の社会的淘汰です。戦前・戦中の有り恐ろしい時代が再び繰り返される可能性を感じます。

こちらのお二人は小学校の途中までしか学校に行けなかったんです。

大矢「小学校2年生までだったんですね。」

黒崎「そうです、2年生で学校に行けなくなりました。戦争だったから。学校をやめてぶらぶらしていました。空腹の中、盗みも働きました。母親が死んだこともありました。」

こちらの谷さんは、小学校5年まで神戸の聾学校で学んでおられました。けれども空

襲のために疎開せざるを得なくなりました。小学校の卒業証書もお持ちではありません。中学校の卒業証書もちろんありません。みなさんどうですか。義務教育をきちんと受けられない人たちが、ふくろうの郷にはたくさんおられます。

これはこの人たちの自己責任ですか。ろう者の責任だと思いますか。国の責任ではないですか。就学の義務は戦後ですが、就学年齢の方も教育が受けられませんでした。

今も、谷さんたちへの義務教育の保障はありません。ふくろうの郷ができ、安心を土台に、信頼関係を土台に、ふくろう大学も施設内の取組みとして始まったこともあり、みなさんがご自分人生を、思いを語られるようになったのです。それを恥ずかしいこととしてしまったり、自己責任でかたづけしないで、社会に、国に発信しています。

さて神戸ろうあハウス、今JRの兵庫駅の西の高架下にありますね。なかまは25人。そのなかまがそろって様々な作業を生きがいとしています。

雨漏りがあり、ネズミが走り回る、そして狭い、暑い。そんな苦勞を我慢しながら、辛い思いをしながら働いておられます。我慢しなければならないのは、彼らが重複の障害者だからでしょうか。

ふくろうの郷で終わりでなく、神戸ろうあハウスの一人ひとりの仲間たちの暮も考えなければなりません。その人たちをほったらかしにしていいわけありません。

もっと清潔で利用したいという方を受け入れられる神戸ろうあハウスに変わらなければなりません。神戸ろうあ協会の責任だから、やり方が悪いから、そのように考えていいのでしょうか。みなさんと共に考えてさらに運動を進めていきましょう。

時間になりましたので、またの機会にします。ありがとうございました。

(大矢氏による校正文のまま掲載)

## 第2部 講演会 講師：湯浅 誠 氏

こんにちは。湯浅と言います。よろしくお願ひいたします。先ほどの加田議員のように、少しでも手話ができるといいのですが、すみません、全くできません。次の機会があれば、それまでに勉強しておきたいと思っております。(拍手)今日は95分いただいています。ですので、4時前くらいまで話をしますが、間に休憩も15分位いれます。そのつもりで聞いてください。

今日のテーマは「障害と自己責任」という言葉でいただいています。自己責任というと、最近話題になったことがあるのをご存知ですか？辛坊治郎さんというニュースキャスターがおられまして、その方が全盲の障害者の方とヨットで太平洋横断のチャレンジをされたんですね。それが途中で何かにつかかってしまったようで、最終的には自衛隊

の方が救出に出るということがあったんですね。1か月くらい前ですか。覚えてますか。そういう事件というか事故があり、その時に久しぶりに「自己責任」という言葉がインターネットでも話題になりました。

というのは、ちょうど10年くらい前に起こったイラクの日本人人質事件というものがあって、イラク戦争のときに日本人の方がイラクにいて人質になってしまったんですね。そのときに日本の国内では、危ないからイラク国外に出なさいと言っていたのに出なかったのが悪いんだから、そんな人たちは救出に行くべきでない、自己責任なんだから、という言い方が結構されました。私は直接存じ上げないんですけども、辛坊さんがそんなことを言っていたようです。あの方は関西のテレビの方なので、関東にいる私はあまりテレビで見ることはないんですけど、そういうことがあったようです。そのときに「救出になんか行かなくていい。自己責任なんだから放っておけ。」と言っていた人が、自分の救出のために自衛隊を呼ばれるようになってしまったわけですね。みなさんはその事件というか、事故を覚えてますか？どうなんでしょう？中にはざまあみろと思った人もいたようですね。「お前、そんなこと言ってて自分の時には自衛隊を呼ぶのか。ふざけんじゃない。」と言った人もいます。

その時私が印象に残っているのは、イラクで人質になった若者、今井紀明くんの言葉です。彼はイラクで人質になった当時高校生で、日本国内では自己責任と言われていたんですが、彼が最近ある雑誌のインタビューでこういうことを言っていたんですね。「辛坊さんが以前自己責任だと言っていたことは関係がない。どんな人であってもそういう状態になったら、救出されるべきだ」と言っていたんですね。私はそれが大変印象に残っています。

今井君は今、大阪でお仕事をされているんですが、あの事件の後はずっと大変だった。高校生であれだけ日本中を騒がせる形になって帰ってきた。とても強い批判を浴びる形で帰ってきた。ですから彼は心に傷を負いました。帰ってきた直後などは道を歩いていると突然殴られる、見ず知らずの人にいきなり…そういうような経験をしているんですね。うつ状態になりまして、大学は誰も自分の事を知らない土地に行きたいということで、生まれ育ったところとは全く関係のない九州の大学に行きました。それでも日本中を騒がせた事件だったからやはり彼の事を知っている人がいて、わたしもその当時の事を知っているわけではないので、何とも言えないですが、社会との交わりを断って、というかなるべく目立たないように生活していたようです。

彼は2年前から大阪で活動を始めました。何の活動かというと、彼のお仕事でもあるんですが。通信制高校ってわかりますか。高校には全日制と定時制とがあって、ほとんどの子は高校には通いで行くわけですが、一部通信制という形で家にいながら高校の授業を受ける子がいるんですね。これは教育の話になるので今日はあまり長くは話しません。今、通信制高校の高校生が増えていましてね。なぜ増えているのかというと、小中高の不登校とか引きこもりが増えていて、かつ定時制高校が統廃合などで減っていつ

ているからなんですね。

今、通信制高校に通っているというか登録している子が全国で20万人位なんです。その子たちに、アートの授業などをやるというNPO、アルファベットで分かりにくいんですが「D×P」という団体を作りまして、大阪では若手のNPOとか、彼のような社会的な問題解決を仕事とすることを社会的企業と言ったりするのですが、そういうホープの一人として活躍されています。私も何度か一緒にお酒を飲んだりして、「ある日突然歩いていて殴られた」、なんていう話もその時に聞いたのですが、そういう経験をした彼は、辛坊さんが過去に何を言っていたかは関係ないんだ、と言っていた。彼は今27歳かな？28歳かな？まだ若者ですけど、とっても立派な態度だと思います。

そのことを聞いて、私が思い出したことがあります。それは何かというと、私の兄が障害者なんです。身体障害、筋ジストロフィーではないんですけど筋委縮性の病気です。私が小学校に上がるまでは補装具をつけたら歩けていたんですけども、筋肉が委縮して歩けなくなってきて、兄が小学校3～4年くらいの時から車椅子になっていたと思います。

そのとき我が家は東京都の小平市というところに住んでいました。小川っていう駅があるところです。小川には小平養護学校というのがあって、今は養護学校とは言いませんが…兄をそこに通わせるために父親が近くに家を建てたんですね。ちなみにそのときに小平養護学校でうちの兄を教えてくれていたのが、藤井克徳さんで、きょうされんの理事って言ったらわかりますか。彼も当時は目が見えていて、先生をされていました。それから30年くらいして藤井さんに活動を通じて会ったんですが、「湯浅と言います」と言ったら、うちの兄はイクオっていうんですが、「おお、あの湯浅イクオ君の弟か」って。「そうです」「僕はね、小平養護学校でイクオ君を教えてたんだよ」って言われて「そうなんですか」という話で盛り上がったのを覚えてます。

辛坊さんのその件を聞いて思い出したことがあります。小平養護学校の最寄り駅は小川駅だったんで、小川駅ではかなり早くに駅にエレベーターを付けてくれ、っていう障害者の人たちが中心になった運動があったんです。1970年代、今から40年以上も前です。私はまだ小さかったのであまり覚えてないんですが、うちの母親もちょっと関わっていたようなんです。そのとき小川駅にエレベーターを付けてくれっていう動きがどういふ反響を小川という地域にもたらしたのか、よくは知らないんですが、同じような時期に大阪の方で、障害者の人たちと一緒に駅にエレベーターを設置することを求める運動をしていた早瀬昇さんという人としばらく前にお会いしました。大阪ボランティア協会の人なんですが、そのときに早瀬さんが言っていたんです。「あのころは、障害者は家にいればいいじゃないか、なんであんたたちのために駅にわざわざエレベーターを付けなきゃいけないんだと、と随分言われたもんだ。」と。そうだろうな、そうだったんだろうなと思いました。

もしかしたらうちの母親もそのように言われたのかもしれないな、と思いました。あ

れから 40 年経って今どうなっているかという、もちろん全国津々浦々隅々までということにはなっていませんが、少なくとも都市部とか大きなターミナル駅では、駅にエレベーターをつけることがある意味で当たり前になっているわけですね。それでそのエレベーターを誰が利用しているかという、もちろん車椅子の障害者の人は利用していますが、それだけではなく高齢者、つまり、おじいちゃん、おばあちゃんですね。また、ベビーカーを押して、荷物をいっぱい持つてお母さんとか、そういう人でない私も、疲れたときには利用することがあります。そのように誰でも利用しているわけです。

今、駅のエレベーターを当たり前のように利用している例えば 80 代のおじいちゃんの中にも、40 年前に障害者は家にいればいいじゃないか、そんなことに金使うな、と言っていたおじいちゃんがいるだろうと思うんですよ。そう思うんですけど、その時にあなたたちには使ってほしくないんだ、とは言わないですね。みんなが使えるようになって良かったね。エレベーターがないがゆえに外出を断念するなんてことをしなくて済んでよかったね、っていう話になると思うんです。

これは何を意味しているかという、しばしば自己責任論的に言われちゃうことはあるわけです。私なんかホームレスの方たちの活動から始めていますから、ずいぶん言われました。お前が炊き出しやるからこの公園にホームレスが集まるんだ、と。そんなことやらなきゃここに住む人がいなくなるんだ、とか言われることもありました。ホームレスは好きでやってんのに、あなたたちが余計なお世話を焼くからいつまでたっても路上から抜けられないんで、あなたたちが何もしなければ、本人たちは何とかして抜け出しているものなんだよ、よけいな手出しをしなくていい、甘やかすだけだ、などずいぶん言われました。ですが、そういう風に言われてきた人たちは、今井君にしても障害者の人たちにしても他の人には自己責任という言葉は使わないんですね。言われたことを人に向ける人と、言われても相手には向けない人、世の中にはこの 2 種類の人がいるんですね。そのときに、ではどっちが世の中をよくするのか、豊かにするのが問題なんだと思うんです。

それを考えていく中で、そもそもいわゆる自己責任論って何か、を改めて考えてみたんです。私は実は言葉が悪いと思うんです。「自己責任論」というのは正確な表現ではない。どういうことかという、自分で頑張ろうと思う気持ち、これは誰でも必要なことだし、ないよりはあった方がいいわけで、これはもう議論にならないですね。けどもいわゆる「自己責任論」というのは、自分で頑張る気持ちを持つ、というのとは違う話なんですね。言葉には用法というのがあるんです。「自己責任論」というのは決まって他人に使う言葉なんですね。つまりあなたの責任でしょ、というわけです。あなたの責任でしょという風に使うのが自己責任論なんですね。実は自己、ではなくて他己なんですね。あなたの責任でしょって使う。だから、「他己責任論」という方が実はわかりやすい。その時にそれを言う人は何が言いたいのかということですが、これはもちろん推測にすぎませんが、私はこう思います。あなたの責任でしょ、という形で「自己責任



論」ならぬ「他己責任論」を使う人は、そのことによって本当に一番言いたいことは、「俺は関係がない」ってことが、言いたいんです。俺は知らない、おれの責任じゃない、ってことが言いたいんですね。

例えば子供の世界でいじめがあるじゃないですか。いじめには3つの当事者がいる。いじめている子「いじめの加害者」といじめられている子「いじめの被害者」そしてもう一つはそれを見ている「傍観者の子たち」。少なからぬ人たちがいじめの経験を持っていると思うんです。いじめた経験、いじめられた経験、傍観者だった経験を持っていると思うんです。少なくとも私は三つとも経験しているんです。私が今の自己責任論で考えて一番気になるのは傍観者の子達。いじめの加害者もいじめの被害者も数としては少数、大多数が傍観者の子達。その中でどういう気持ちが働いているかと考えるんです。自分の経験から考えてもそうなんです、最初にそういう経験に出くわしたり、誰かをいじめているところとか、察知したとき、なんとなく気持ちがざわつくんですね。それと同時に自分のなかに二つの気持ちが生じるんですね。ひとつは止めに入った方がいいんじゃないかとか、先生に言った方がいいんじゃないかという気持ち。あるいはいじめられている子を励ましてあげた方がいいんじゃないかという気持ちが一方で起こりながら、他方では、下手に介入するとこっちにくるぞ、いじめの矛先がこっちにきたら嫌だなという気持ち。その二つの気持ちが、同時に自分の中で起こるんですね。それで悩むんですね、どうするか…と。こういう状態って、人をとても不安定にするんですね。つまり相容れない二つの声が自分の中にあるから、苦しいんですね。だからこれに早く決着をつけたい。早く決着をつけて楽になりたいと思うときに、多くの子がどうするかというと、一番簡単な方法が、そのいじめられている子の問題にしちゃうんです。あの子の笑い方が気持ち悪いからいじめられるんだ、それを直せばいいんだ、と考えるんですね。いじめられているのにヘラヘラ笑っているから、いつまでもいじめられるんだ、嫌だったら嫌って言えばいいのに、言わないからいじめられるんだと。そういうふうにしてその子の問題にしちゃうんですね。その子の問題にしちゃうと自分の気持ちの葛藤から解放されるんです。気持ちの葛藤…自分が介入すべきなのにできない、自分は情けない奴だ、勇気がない奴だと思ってみたり、下手に介入して、こっちに矛先が来たら困っちゃう、自分が被害にあうのは嫌だと思ってみたり、そういう自分との対話ですね、その状態の苦しさから、あの子の問題にしちゃうことで解放されるんですね。これはあの子の問題なんだから私の問題じゃない。だからあの子が嫌だったら直せばいい。

で、この時に二つ切り捨てたものがあると私は思うんです。ひとつは、社会の一員としてのその子を見捨てた。介入した方がいいか、とか励ました方がいいか、とか思うのは、同級生としての仲間意識があるからですよ。自分にできることがあるんじゃないかと思いつつ、同じクラスの一員としてのその子を見捨てた。切り捨てたものがもうひとつある。それは、その子の中にいるもう一人の自分の声。なんかやった方がいいんじゃないか、できるんじゃないか、と言っていた自分の声、自分の中の声にふたをしち

やったということだと思っんです。

そうやって、自己責任論ならぬ他己責任論というのは、二つのものを切り捨てるんですね。同じクラスの一員としてのその子と、もう一つ自分の中の声。それを世界全体に当てはめると分かりやすいと思う。

私に関わってきたホームレス支援でもそうなんですが、いろいろやっていると海外のホームレス支援とも繋がったりするんですね。外国に行って現場を見せてもらったこともあるんですが、いろんな国のホームレス支援を見ていると気づくことがある。それは、日本人って全くその人たちがいないように歩いているな、視界に入っているはずなんだけど、まるで存在しないかのように歩いているということです。これは当たり前のように、当たり前ではないんですね。韓国のソウル駅の近くにホームレスの方たちがいるんですが、いろんな人たちが声をかけていくんですよ。説教しているようなおじさんもいれば、おばちゃんがキムチあげてたりとか…そりゃ全員はやりませんよ、全員ではないんですが、10分に一人か30分に一人か必ず声をかけていくんですね。そういう人たちが全く目につかないのが日本の路上なんです。けれども、じゃあみんな何も感じていないかという、実は感じているんですね。それはなぜわかるかという、私たちのような支援団体にメールがくるんですね。相談がくるんです。

例えばこんな感じです。「自分の通勤している経路にいつも決まったホームレスのおじさんがいる。気になって気になってしょうがない。でもどう言葉をかけたらいいかわからない。差し入れたら失礼になるのかも思う。どうしたらいいのか、教えてください」とメールで相談してくる人もいるわけです。きっとその方は、毎日通しながら気になっているんですね。それはまさに先ほどのいじめを見ている子のような葛藤がその人の中に起こるんです。自分が介入した方がいいのか、でも下手に介入して傷つけても申し訳ないしな、とか妙に絡まれても嫌だしな…とかいろいろ思っちゃって、それで何していいかわからない、という状態になるんです。これはちょうどいじめを見ている第三者の状態に似ているんですね。それじゃどうやったら楽になれるかという、このホームレスのおじさんたちは好きでやっている。嫌だったら抜けりやいいのに、そうやってないから抜けられないんでしょ、と、それはこの人たちの問題だ、そう思えたら楽になる。私の問題じゃなくなるから。私が毎日毎日どうしたらいいのかって考えなくてよくなる。そのことがいわゆる自己責任論、正確にいうと他己責任論というやつです。そのときに同じクラスにしろ、社会にしろ、切り捨てているものが二つあるといいました。社会にしていうと、同じ社会の一員としてのその人を切り捨てるということと、自分の中のもう一つの声、何かできるんじゃないかという声を切り捨てるということです。そういうことをずっと積み重ねていて、人として豊かになれるのか。私は、ちょっと悪い言い方をしますと、そういうことをずっと積み重ねて大人になっていくと、ある種の不感症になっていくと思うんです。いろんな場面に出くわしたときに、私たちは気持ちの迷いがおこるんです。こうした方がいいか、それともああした方がいいか…と自分の中

で迷うんです。迷いが生じた時に、こうに決まっている、と一方を常に押さえて切り捨てていく。そういうことをずっと繰り返していく。子供の頃いじめを見た時に、あの子が悪い、私には関係ないと切り捨てる、そういう風に切り捨てることが習慣化していくと、切り捨てていることにも気づけないようになってしまうんじゃないかと心配しています。

私自身の経験ですが、1995年、阪神大震災の年にですね、東京の渋谷で路上のホームレスの方の活動に初めて参加したんですね。渋谷っていう町は、皆さんご存知と思いますが、繁華街ですから、私もそれまでも遊びに行ったりしています。友達と一緒に居酒屋に行ったりしています。だけどその町に当時100人のホームレスの人が暮らしていた。活動で行ったときに、初めて100人の人たちのところを回って歩きました。その時にすごく驚いた。何に驚いたかという、私がふだん遊びに行ったときに通っているところに寝起きている人がいるんですね。いるんだけど、今までそんなことは気づいたことがなかった。つまり関心がないんですね。関心がないので、この街にホームレスの人がいるんだろうかと思ったことすらないんですよ。視界には入っていたけれど脳みそまで情報が届いていないというか…気づかない。気づかなくて、夜回りといったり、パトロールといったりしますが、そのために行ってみて初めて、ここにも寝ている人がいたんだとわかる。その時私が思ったのは、人間って本当に見たいものしか見てないんだということです。目は取捨選択しているんです。視界に入ったすべてを意識に上らせるのではなくて、視界に入ったものの中から、自分が興味ある、関心があるものだけをピックアップして印象に残している。視界に入っても覚えていないものはいくらでもある。

そうすると、関心がないとその存在すら気づかない、ということになるんだなあとの時思いました。そのことが今の話と関係してくると思うんですが、自己責任論ならぬ他己責任論的に、いろんなものを切り捨てていく。それが習慣化したら自分が切り捨てていること自体が自覚できなくなる。そうすると多分いろんなことに気づけない人になるんですね。世の中で起こっているいろんなこと、自分のまわりに実はいろんな人たちが暮らしていたり、いろんなことが起こっていたりするんですけど、そのことに意識が向かないというか、悪気がないんだけど存在しないかのように扱うようになる。それは人として怖いと思う。

こういうことがあるんです。東日本大震災直後に、私は当時震災ボランティア連携室の政府の室長をやっていた。そこに手話通訳者の団体の方が来られたんですね。50人だったか100人だったか正確な数は覚えていないんですが、「自分たちとして手話通訳ボランティアを派遣する用意がある。避難所にはきっと耳の不自由な人がいるはずだ。どこにいけばいいですか？」と聞かれたんですね。どこに行けばいいですかと聞かれて私たちは困りました。そういう情報がなかったからです。まだ震災直後の混乱で耳の聞こえない人がどこにいるかという情報がどこにも存在していない。避難所もご承知の通りものすごい数ですから、自分で回ってください、というわけにもいかない。それで調

べようとするんですが、なかなか調べられないんですよ。

なぜかという、ひとつには自治体の職員さんというのは、あれほどの大災害があったときには避難所にはいられないんですね。これがまたさらに大きな問題を起こすので、またこの話をし出すと長くなるんですけど。なぜいられないかと一言でいうと、他のことで寝ずに働いているからです。他のことというのは、亡くなった方の遺体の処理とか、安否確認リストの作成とか。日々新たなご遺体が見つかったり、新たな行方不明者が判明したりしますね。

例えば一つ例を挙げると、どんどんご遺体があがりますから、火葬しないといけない。でもあれだけの大災害ですから、沿岸部は火葬場も水浸しになってしましまして、火葬場が足りない。焼けないんですね。それでどうしたかという、宮城県とかはご遺体を自衛隊のヘリコプターに載せて、東京の八丈島へ持って行って焼いた。焼いて戻して埋葬するというのを一体一体しました。間違えたら大変ですね。誰が行って誰が帰ってくるのか、灰になって帰ってくるので気を付けないと間違えてしまいます。そういうのをひとつひとつ手違いがないように誰がやるかという、自治体の職員がやっていたわけです。

またある時は公務員が棺桶を作ってたんですね。この話は阪神大震災の時にも聞いたんですが、神戸市の職員の方が「自分は10日間くらいずっと棺桶を作ってた」と言っていたんです。この間、岩手県の釜石に行ったんですけど、市役所の職員の方と飲んでいるときに、「神戸の時はこういう市役所の職員さんがいたんですよ」と言ったら、私の隣にいた30代の釜石の職員さんが、「まさに自分がそれやっていました。私もずっと棺桶作ってました」と言っていました。実際に職員さんの数も減っているんで、ご遺体のこととか、安否確認とかリスト作成とかそれだけで手一杯になってしまう。

それで何が起こったかという、結果的に避難所には自治体の職員さんが張り付いていないということが起こったんです。そうすると情報がいつまでたってもあがってこない。あがってこないんで困ったなと思って、次に私たちがやったのは、NPOの人たちに自治体避難所を回って聞いてもらいました。この避難所には障害を持たれている方が何人いますか？ どういう方たちがいますか？ そう聞いてもらって、その情報をシェアするわけですね。NPOの方が、そうやって避難所を回って、いろいろなアセスメントをやる。例えば、トイレは清潔に保たれているとか、病院は歩いて何分くらいのところにあるとか、バス停は歩いて何分のところにあるとか、水はちゃんときているとか、を聞いて回るんです。その人たちに頼んで障害の事も聞いてもらったんですが、そのときに次の困ったことがあった。

彼らも回って聞くわけですから、そこに住んで自分で観察することはできないですね。なので彼らは誰かに聞くことになる。誰に聞くかという、避難所の管理運営者の人に聞くんですね。避難所の管理運営者の人というのは、自治会の自治会長さんなんかさがされているわけですが、その方に「この避難所で障害を持たれている方は何人いますか？」

と聞くと「3人です」と返ってくる。「どなたですか?」「あそこあそこあそこに車いすがあるでしょ。だから3人です。」障害者は車椅子に乗っているもんだということになっている。車椅子に乗っていない人は障害者じゃないだろう、ということ。その自治会長さんは何の悪気もないですよ。でも、その自治会長さんにもこう言えばわかる。「車椅子乗ってなくても障害持っている人っていますよね。例えば目の見えない人、耳の聞こえない人…」そういうと「ああ、そりゃそうだな」ってことになる。普段からそういうことを意識したことがないんでしょうね。アンテナが張られていないからそういう回答になっちゃう。それで結局そのやり方でもわからなかった。わかんないので、どこに行ってくださいって言えなくて、結果的にはそれぞれのネットワークの中で探してもらうしかない。

駅にエレベーターを設置するっていうのは、いわゆる物理的なバリアフリーの問題ですけど、意識のバリアフリーとか心のバリアフリーというのは、そういうことにどれだけアンテナを張れているとか、問題意識をどれだけ持っているかということに影響すると思うんです。つまりこれは障害だけの話じゃないぞ、というのは、さっきのいじめの話とか、ホームレスの話で、結局自己責任論というのは、あんたの責任でしょということです。自分の責任じゃないということを示して、それによって自分の中のいろんな心の声押し殺して切り捨ててしまうと、結果的にいろんなことに気づけない。これは障害を持っている人に対してだけではなくて、ホームレスの人とか、女性の人とかも同じことが言えます。

例えば自治会長さんが60代のおじさんで、若い女性から間仕切りが欲しいという声が上がります。避難所はプライバシーがないので、間仕切りが欲しいと。我々はパーテーション（間仕切り）を結構な数送ったんですが、これが1か月たっても避難所に設置されていないという情報を聞いて、どうなっているんだ、いったいどこで止まっているんだと見に行ったことがあります。そしたら避難所まできてるんですけど、倉庫で眠っている。なんで設置しないのですかと聞いたら、「ここに避難してきている人たちは、昔からこの土地に住んでいる人たちで、みんな家族みたいなものだからパーテーションで区切る必要はないんだ。」と言ったんですよ。そういう感じになっちゃう。

そうするといろんなものが見えなくなる。人として見えなくなる。私は、これは人としてマズいと思う。人として貧しくなってしまうと思う。多分日本社会はこれから、少子高齢化にしても、人口減少にしても、財政難にしても多くの課題を抱えていきます。マニュアル通りにはいかないという現実の中で、答えがない社会の中で、どう自分で考えて、自分で想像力を駆使して、そして創造性を発揮して、自分たちなりの解答を見出していけるか、これが大事だ、とみんなが言っている。想像力・イマジネーション、創造性・クリエイティビティ、を十分に発揮できるような人たちがもっとたくさん日本社会には必要なんだ、と一方で言っているときに、一方でそういう人たちを減らしていってしまう。いろんなものを切り捨てて、切り捨てて、そして切り捨てていることにすら

気づけないという人たちを増やしていってしまう。これは人としての貧しきで、結果的に日本の社会としての貧しきに結びついてしまうと思う。だから私は自己責任論では問題はうまくいかないんですよというんですね。それは、自己責任だと言われているホームレスの人が可哀想だからじゃない。野宿の人の中には立派な人もいれば、そうじゃない人もいます。それはお金持ちの中に立派な人もいればそうじゃない人もいるのと同じことです。そんなのはどこでもおなじこと。すごく立派な人だから対応すべきであると言ってしまうと、逆に立派でない人は対応しなくてもいいということになってしまう。そういう問題ではなくて、むしろ自己責任論的なことを使うことに自分を慣らしてしまうことによって、それに慣れてしまうその人自身がどうなのか。これを使い慣れてしまうことが、その人にとってプラスなのかどうかを考える必要がある。そして社会にとってそれがいいことなのかどうか、社会を豊かにすることなのかどうか、そういう観点から考える必要があると思うんです。それは多分自己責任ということに加えて、世の中がどうやってまわっていくか、障害の分野のテーマでいうと、自立って何だ、ということにも関わってくると思うんですが、そういう話をしている内に小一時間立ちましたからここで15分休憩を入れます。

(休憩)

事前にいただいた質問の中で、「湯浅さんの価値観について。豊かさとは？」という質問をいただいているんですが、それが前半に話したことです。自己責任論的にいろんなものをそぎ落としていくと、人としても貧しくなるし、社会としても貧しくなる。豊かさというのは逆だと思っています。つまりいろんなことに直面した時に、自分の中にいろんな考えとか、ときに相矛盾した声がおこるんですね。それに向き合えるというか、多様な価値観を自分の中で理解できるというか、いろんな人と対話できるというか、そういうことが人としての豊かさなんじゃないかと思うんです。

自己責任論は社会や個人を豊かにしない、という話をしてきましたが、難しいと思う局面がある。どういう場面かという、例えば東日本大震災が起こった時に、東京は震度4だったんですね。さっき話したうちの障害を持った兄貴が具合悪くなっちゃったんです。具合が悪くなって、夜眠れなくなった。しばらく経って医者に行ったら、PTSDだって言われた。具体的な場面は知りませんが、日中は作業所で働いていますから、その時に地震を経験したんです。電動車椅子なんですけど、怖い思いをしたのかもしれませんが。本人はあまり語りませんし、詳しいことはわかりませんが。とにかく眠れなくなって、しばらくそれが続いてどんどん調子が悪くなって、結果的にその時我が家はどうかというと、築30年の実家を建て替えた。兄貴がこの家大丈夫なのか、地震があったときに耐えられないんじゃないかと不安になって眠れなくなったようなので、母親も精神的にまいっちゃって、建て直したんです。親父は12年前に亡くなっているんですが、幸いうちの親父が遺してくれていたお金があったんでできたわけですが。

そのシチュエーションってなかなか声を大にして言えない。東京じゃないですか。家

族的にはとても大変な状況なんですけれども、肉親が死んだとか、被災地で起こっていることを考えると、これより大変な人はいくらでもいるよ、ということになる。そういう中で、うちの兄貴のこの事情ってなかなかわかってもらえないだろうなという感じはするわけです。わかんないと言われてもしょうがないとも思うんです。その時に何を考えるか、なんですが、そうしたことも伝えられる言い方とか、考え方とか…。あるいはそういうふうに聞いた時に、そりゃ大変な状況だろうけど、世の中もっと大変な人はいるんだからね、と思う人はいるじゃないですか。それはどんなケースでもいますよね。思う人の理屈に沿って、その人に理解してもらうように言うにはどうやったらできるんだろう、と考えるんです。

今日のサブテーマは「理解を広げるために」です。そのことに関連した話に入っているのですが。私なんかは貧困問題を何とかすべきだ、と10年以上言ってきたんです。ホームレス問題に関わり始めてからかれこれ20年近くになります。とにかく最初は誰にも相手にされな時期が長かった。その中でなんでそうなるんだって私は思っていましたけれど、世の中の大半の人からしてみれば、なんでお前はそんなことに興味を持つのか、とそこが理解できない。つまりこっちも相手の理屈が理解できないし、その人たちも私の理屈が理解できない。そこにどうやってブリッジをかけるか、橋を架けるか、です。橋を架けるためには、お前の言っている理屈こそわかんない、という人を想定しなくてはいけない。その人にはその人の必然性があるんですね。何十年か生きてきて、その人の人生があって、いろんな経験があって、そしてその人はその意見を持つに至っている。だとしたら、それがどういう経験と理屈なんだろうかということを理解することが、その人と話すには大事なんですね。それを全部無視して、とにかくお前は俺の言っていることを聞いてりゃいいんだって言っても、その人は絶対気持ちを開かない。理解しよう、この人の言うことを聞こう、と思わない。となると実はAさんの持つてる理屈を私が自分の中で持つてるか、ということが問われるんですね。そういう理屈を持つて生きている人が世の中にいるってことを私が理解して、自分の中にそういう意見が持つてると、そこで対話ができるわけですね。そこで普段対話ができるから、その人とも話ができる。ところが、さっき言ったように、いろんなものをどんどん切り捨てていっちゃうと、そういう人は自分の中に存在しないことになっているから、現れた時に対応できない。「お前の言っていることなんてさっぱりわからない。信じられない。」ということになる。そうすると相手もそう言いますね。「いや、お前が言っていることこそ信じられない。」そうすると話ができない。対話できないとより良い意見は生まれません。そうするとどうなるかという、最終的に多数決を取ることはできない。俺はAという意見だ、お前はBという意見だ、あの人はCという意見だ。Aという意見、Bという意見、Cという意見を持つている人が世の中において、3人とも一歩も譲らない、おれが正しいに決まっている、お前が間違っているに決まっている、と三人全員が言い続けた。最後どうすればいいか。どっかで多数決をとるしかない。一人でも多かった人の意見を採用、他

の意見は切り捨てる、ということをしるを得なくなる。それが未来永劫決めないか、どちらかしかない。対話をしたり、合意形成をしたりしようとすると、相手の拠って立つ立場とか理屈とか、世の中にはいろんな人がいますから、いろんな意見がありますよね。自分にとってはかなり違和感があったとしても、その人にとっては真実であり、場合によっては正義でもある。相手の意見の「それってどうなっているのかな」ということを、ある程度自分の中に持てると、いろんな人と話ができる。逆に言うと、自分の考えの理解も広げられる。相手の人の話を聞く耳をもっているから、相手の人も聞く耳を持ってくれるからですね。この人は自分の言うことを理解してくれると思えば、その人の言うこと聞こうとしますよね。その人の言うことを聞いてみようかなという気になる。そういう多様性を自分の中に持つことが、人としての豊かさとして重要なんだと思っている。だからその路線と、自己責任論的な路線は対立しちゃうんです。だけど自己責任論を振りかざす人に対しても、自己責任論的には対応しない。切り捨て型でこっちもいっちゃうと、結果的にこちらも同じように貧しさにはまってしまう。それは最初に言った今井君とか、障害のバリアフリーの話と同じだと思う。それが私が考える豊かさで、これが社会の豊かさにもつながっている。さっきも言いましたが、想像力と創造性ですね、それを発揮できる社会の条件というのは、そういう個人がたくさん生まれることにあると思うんです。

そういう見地からいろいろ理解を広げ、運動を広げていく必要があると私は今思っています。私は反貧困ネットワークを作って5～6年活動してきているんですが、質問の中にこういうのがありました。「今後障害や貧困など分野を越えて運動していく必要があるのでは？」答えは、あると思います。私自身はそれなりにやってきました。反貧困ネットワークというのは、そもそもそのために作ったようなものです。それは今の話とつながってるんですが、障害と貧困と、ホームレスとかドメスティックバイオレンスとか児童虐待とか、性的マイノリティとか、世の中にはいろんなカテゴリーの社会課題があるんですよ。その人たちがみんな横に繋がってやっているかというのと、必ずしもそうではない。私たちはよく役所の人たちを縦割りだ、縦割りだと批判することに慣れていますが、実は民間も縦割りです。かなりしっかりした縦割りがあります。私もそうでした。ご質問のなかに「ホームレスの聴覚障害者に会ったことはありますか？」というのがありますが、あります。私たちのグループに手話のできる人は一人しかいませんでしたから、彼女がいないときは筆談をしていました。もうちょっと言うと、路上におられる方の、知的障害者、精神障害者の割合がどのくらいいるかというのを池袋の団体が調べたことがありまして、この時に出た割合は4割でした。北九州で、施設に入った方に障害者手帳の取得を支援するというをやっている団体もあるんですが、1年間に入所される人の中で、障害者手帳を取れる方が6割。ですから路上にいる方の中には、世間一般でいう障害者、障害者手帳を取得できる方がおられる、ということ。それが例えば、家庭環境などで気づかれないまま、本人も気づかないままきていたとい



うことがしばしばあります。じゃあ私が路上でやっていたときに障害者団体と深く連携しながら一緒にやっていたか、というとそんなことはなかったですね。それから路上には女性がいます。数は少ないですが。女性は大概の場合はドメスティックバイオレンス (DV) 被害者。その女性はDV施設に入るわけです。DVセンターを運営しているのは誰かという、私たちと同じような民間の手弁当のスタッフの人たち…その人たちと密接に連携しながらやっていたかという、そうでもなかった。つまり似たようなところでやっているし、多分10歩くらい離れてみれば、あんたたち同じようなところでやるよねって見えるかもしれないですけど、全然つながりはありませんでした。何とかそれをできないかなと思って始めたのが「もやい」という団体。その時に何を考えたかという、アパートに入るときの連帯保証人を立てる、ということ結びにしたらうまくできるんじゃないかと思った。ホームレスの人もDV被害者の人も、実家に知らせると別れた夫や逃げてきた夫が押しかけてきて、お父さんお母さんに迷惑をかけるからと実家にも教えない、という人が多い。だから連帯保証人も頼めない。高齢者もそう。先ほどご報告の中で、精神病院に長期入院されていて、今はふくろうの郷に入っているという方のお話もありましたけど、精神病院で長期入院していて退院する人もそう、保証人がいないんです。みんな保証人で困っているから、保証人問題に対応します、というところを突けば、繋がれるのではないかと思った。案の定、繋がれました。貧困問題も、同じ発想です。アパートの保証人を貧困問題に置き換えた。障害者団体の方たちに聞けば、重度障害者の人たちは障害認定の重度加算のことが一番の問題だったり、あるいは障害者自立支援法が一番の問題だったりするわけです。母子家庭の団体の人に聞けば、児童扶養手当の問題が一番の問題だったりするわけです。ホームレスの人たちにとっては就労支援などが一番の問題だったりするわけです。つまりそれぞれにとって一番の問題は違うんですね。それぞれ違う中で、おれの一番をお前の一番にしろって言ってもそれは無理なんですよ。そんなやつらと一緒にやれない、ということになるだけです。一番じゃないかもしれないけど、二番目か三番目に生活の大変さとか苦しきという課題がありますよね。となると、障害の人たちも、生活保護を受けている人は多いし、低所得問題は大問題であるということになるし、母子家庭の人たちも働いても働いても貧困状態だし、みんなに共通する課題を見出すことができるというわけなんです。こういうふうに行ってきました。それで一定の力を持てたと思っていますが、同時にこの1～2年はその限界も私は感じています。どこまで一般化できるかわからないからあくまで私の経験としてお話します~~が~~。自分ではそれなりにいろんなことをやってきたつもりです。かれこれ20年になりますが、自分で思いつくことはすべてやってきたつもりです。東京の渋谷で活動を始めた時は、本当に誰からも相手にされなかったですけども、聞く耳を持ってくれる人は、あのころに比べると随分増えたと思っています。けれど、やっぱり冷静に見るとまだまだだと思っています。今の問題を話しましたがけれども、関心を持ってくれない人の方が、世の中にはまだまだ多いとも思っています。物理的なバリア

フリーだけじゃなくて、意識のバリアフリーとか心のバリアフリーとか、そういう問題もある。そういう人たちが世の中に暮らしていて、それに対してどう対応していけるかということ意識したり、学んだりすることが、例えばいざ災害が起こった時に、どう暮らしていくかに大きく影響する。阪神大震災を経験された方ならご存知だと思いますし、東日本大震災の被災地の方々も今、それを痛感しているところなんですけれども、そういう問題意識もやはりまだまだ当たり前にはなっていない。まだ届いていないところも膨大にあるなど。そこで私考えました。20年やってきて、自分で思いつくことはやってきた。やってきたけれどまだ届いていないところはいっぱいある。そこにも聞く耳持ってもらおうと思うと、まさに理解を広げるというテーマですが、理解を広げていかなないとこの先は動かないだろう、と思った時に困っちゃった。思いつくことはやってきたわけですよ、でも届いていないんです。なら思いつかないことをやらなきゃだめだということになりますよね。自分が思いつくことではダメだ。で困りました。けど論理的にはそういうことになると思ひまして、いろんな人に意見を聞こうと思ひました。私が決めていたのは、なるべく今まで付き合ったことのない人、なるべく今まで接点がない人、例えばIT会社の社長とか、インテリアコーディネーターとか、今まで自分が接してきたことのない人、そういう人と積極的に交わって、自分が思いつかないようなことを言う人の言うことを聞こうと思ひました。思いつくことはやってきてでもまだ届いていない。自分の想定内のことを言う人の話だけだとダメだと思ひました。それで、いろんな人の話を聞いてたら、ある人が言った。「あんたまず自分の格好から変えてみたら？」私は全くそんなこと思ひつかなかった。全く考えたこともなかつたので、採用！って、格好から変えていきました。それで最近ではメガネ変えたり、服装変えたりして、イメージしたとか言われているんですが…それはそういうことなんです。つまり、人間追い詰められたらなんでもやるんですけど、越境していかなければならないと思ひたんですね。越境して、ごちゃごちゃやっているやつらがいるらしいけど、なんだか金がかかるばかりじゃないかとか、漠然とした心配と不安とか、あるいはその中にちょっとした偏見が入っていたり、そういうような人が、ちょっと話聞いてみるか、とか、どういうことを言っているのか、それでも世の中うまくいくんじゃないかとか、ちらっとでも思ってもらわないとそこから先に行けないんですよ。ちらっとでも思ってもらうためには何をしたらいいのか。私的にはこういうことが一つ。それ以外にもどこで文章を発表するかという媒体の選び方とか、どういう事例を出していくかという事例の出し方とか、そういうことを今工夫しているんですけどもね。何とか耳を傾けてくれる人の総数を増やしたい。それが理解を広げるということに直結するかどうかは実はわからないんですよ。実はわからないんですけども少なくとも前提にはなると思ひている。やはり人は自分の知らない世界は怖いんです。私もいろんな人と話してて思うのは、例えば、障害とか貧困とか自殺とか、そういう問題に接したこともなければ関心もなかつたっていう人も強い偏見をもっているかということとそうではない。もちろんそういう人もいますけど、

ホームレスについてはむしろ不安なんです。そんなことやり始めると金がいくらあっても足りないんじゃないかっていう不安。俺の払っている税金、果てしなく上がっちゃうんじゃないかっていう不安。どれだけやってもきりがないんじゃないのっていう不安。そういう不安をもってるんです。その不安に、弱い偏見が結びつく。強い偏見じゃなく、弱い偏見…そんなことやらなくていいよっていう。不正受給事件もあるし、みたいな形で情報が入ってくると、その不安に響くんです。それでいいか、みたいな気持ちになる。だから必要なことは、私が必要だと感じてやっていることは、その人たちの不安を取り除いてあげなきゃいけないんじゃないかと。それは実はそんなに膨大なお金はかかりませんか、うまくいっている事例はいくらでもあるんですとか、果てしないものはありませんとか、そうしたことを出していくということです。こうした事例はいくらでもあると思っていて、それを出していく中で、敢えて言えば、障害とか貧困とか自殺とか、自分がとりあえずは関係ないと思っている人が、それでも感じている不安に答えるようなメッセージを出していく必要があるんじゃないか、と思っているんです。そのことが今の私にとっては、今より先に理解を広げていくための工夫です。必要だと思っていることです。

そういうときに困ることが起こる。何かというと、こういう状態を「後ろから矢が飛んでくる」っていうんですけれど、つまり…もつととんがったことを言え、っていう圧力というか声があるんです。中間層の不安を考えながらそれに大丈夫なんですよっていう言い方と、この現実を何とかしろっていうときとおのずと言い方が変わる。言い方が変わるときに、前者の言い方で言うと、後者の人には不満なんです。物足りないんです。前者の方から言うと後者の方はより過激だということになる。またここで分断が起こる。このように分野が違うことでも相容れない、言い方ひとつとっても相容れない、ということになると、私たちはどんどんどんどん分散していく。分散していくと結果的に世の中全体の中ではすごく小さいかたまりになってしまう。物事が動くときに吹き飛ばされちゃうような形になっていく。そうならないための知恵が必要だと思っている。さっきの話に戻るんですが、それぞれの問題意識とか、立ち位置とか見えてる現実とか人が人によって違うんです。人によって違って、そんないろんな人がいるのが、地域社会であり日本社会です。みんなが同じものしか見てなくて、みんな同じ意見だったら怖いんですよね。バラバラであたりまえ。その中で、その立場を認めて、理解して、そこで対話するというのが、ホームレス問題とDV問題をやっている人たちの間にも必要だし、障害分野の中でも身体障害と精神障害でもだいぶ違います。身体障害の中でも重度障害と聴覚障害では時に溝を感じるような現実もあるでしょう。さらに発達障害まで広げていったら、障害分野の中でも細分化してしまう。さらにそれを広げて行ったらいくらでも細分化できるわけです。細分化することはいくらでもできる。今やらなくてもいい。今やらないといけないのは細分化することよりも、違いを見つけることよりも、同じ部分を見つけること。そしてそれぞれの役割をそれぞれの中に位置づけてい

くことだと思う。そうしないと結果的にそぎ落としあう。被災地でもそうですけどね。自治体の職員さんの話をしましたが、死ぬほど働いています。実際に死んでいます。健康状態も極めて悪い。自殺している方もでています。被災地の自治体職員さんは文字通り死ぬほど働いています。けどそれで住民の人たちが大変さを理解しているかという、かならずしもそうではない。二言目には役所をたたく。そういうやり方、言い方がまだまだある。また他方でNPOの人たちがいろいろ支援に入っていますね。石巻市、釜石市いろんな地域でそれぞれが本当に一生懸命活動していますが、そんな人たちがお互いの力を足し上げるように活動しているかという、そうではない。相互不信にとらわれたりする。その場にはいない第三者から見れば、何やってんだってことになるでしょう。石巻市なら石巻市のために協力したらいいじゃないか、小さい違いを捨てて、そのために力を合わせたらいいいじゃないかと思う。けどそれを自分たちの事に当てはめると難しい。あいつはこうしたらいいじゃないか、あいつは…というようなことになってしまう。あいつはこんなことをやったことがある。あいつは信用できない、みたいな話になると、結局延々と細分化されてしまう。そこをどういうふう乗り越えるのかというのは、運動だけじゃなくて、障害者運動とか、貧困問題とか個々の課題だけじゃなくて、日本社会全体の課題なんじゃないかと思うんです。もう時間を過ぎていきますので終わりますけど、もう一度最後にまとめます。地域にも社会にも多様な意見がある、障害について無理解な人はいる。そういう無理解な人も含めて、そこに声を届けていく。それはかなり大変なことです。うちの兄貴が震災でPTSDになったと話したときに理解してくれって言ったって難しいと思う。でもその人にも何かしらの形で関心を持ってもらいたいし、耳を傾けてもらいたい。そして、それで理解が広がったよ、と思ってもらいたい。そういうことをお互いが促しあえることが、社会を豊かにするという一方で、個人を豊かにするということだと思う。そうしたときに「自己責任」というのはあまりにもふさわしくない、貧しいものだから、そこにとられるべきではない。けどそれは自己責任論を展開する人をやっつけろって話じゃない。もっと大きなもの。私たちが豊かさとか自分を見据えて行動するための考え方。自分自身を豊かにするということは、そういう態度、ふるまい、考え方、行動だと思っているので、それについての私の弁を話させてもらいました。15分すぎました。これで終わります。

(文責：ひょうご聴障ネット)